

インドネシアのスラウ
エシ島南部に位置するマ
リノ村は農業で細々と生
計を立てる貧しい村だ。

国際医療ボランティアA
MDA(アムダ、岡山市)
のフードプログラムマネ
ージャー、田中俊祐は岡
山と同村を歩き来しなが
ら有機農業の普及を進め
る。付加価値の高い農作
物を育て村民の生活を向
上させるのが使命だ。

有機農業を指南

アムダがフードプログ
ラムに着手したのは20
11年。医療を通じた国
際貢献活動を一歩進め、
「食は命の源」をコンセ
プトに農業を通じた健康
増進と貧困層の所得向上
に乗り出した。同年にア
ジア有機農業連携活動推

海外農村の稼ぐ力培う

縦横夢人

中国地方キーパーソン



「東京よりも農村の方が自分には向いている」と話す

たなか・しゅんすけ 1984年
東京生まれ。2006年日大生物資
源科学部卒。12年青年海外協力
隊、14年AMDA。趣味は津軽
三味線。32歳。

AMDA フードプログラムマネージャー

田中 俊祐氏

進条例を制定した岡山県
北の新庄村に実験農場を
開設し、インドネシアか
らの研修生を受け入れな
がら有機農業の普及活動
に踏み出した。

青年海外協力隊の栽培
指導員としてスラウエシ
島で日本向けに出荷する

サトイモの栽培を指導し
ていた田中はこの活動に
うになった。

共鳴した。14年11月
から 東京生まれの東京育
アムダに移籍しフードプ
ち。日大生物資源科学部

インドネシア 生活豊かに

で国際地域開発を学び協
力隊の門をたたいたが落
とされた。健康上の理由
からだ。アレルギー体質
だった。スーパージョー
に総菜厨房で働きつつ食
事内容を見直した。専門
学校に入り栄養士の資格
を取った。2年間病院で
働いた後、再び協力隊を
受け採用された。アレル
ギー体質は克服してい
た。

電気柵をつくるインフラ
も予算もない。試行錯誤
の連続だ。そんな中で有
機米の需要に手応えは感
じず、地駐在の日本人ほ
かインドネシアで育ちつ
つある中間層が安全な農
産物を買いたい。昨年収
穫したコメは通常価格の
3倍ほどで売れた。今年
の課題は作付面積を増や
すための測量だ。

マリノ村の有機農場は
3000平方メートルほど。
新庄村で研修を受けた女
性が田中とともに指導に
当たる。堆肥を入れ土作
りから始めた。栽培する
のは現地米。新庄村では
水田にアヒルを泳がせ害
虫や雑草を駆除したが、
野生動物が多いマリノ村
ではアヒルは使えない。

学校行かせたい

痛感するのは教育の大
切さだ。マリノ村では多
くの村民が小学校を中退
し家の手伝いをする。地
元の言語しか話せない人
も多く、協力隊で覚えた
だ。「10年以内にはなん
とか実現したい」と先を
見据えている。敬称略
(岡山支局長 鈴木慎一)

中
国

支局
岡福広 山山島 00882-29244
0884-22322-23115
086-225-20715
山松鳥 取 00857-222-22465
口江 00852-221-22198
0883-922-1167